

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2022年2月NO.51

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



人身売買とオンライン性搾取の解説冊子を持ち、表紙と同じポーズをとる子どもたち

特集

子どもたちに迫る新たな搾取／

「オンライン・セーフティ」、「OSEC」の 現状と支援活動

ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。



「オンライン・セーフティ」、「OSEC」の 現状と支援活動

チャイルド・ファンド・ジャパンの活動の柱の一つである「子どもの保護」。身体的な暴力、人身売買、違法ドラッグなど、あらゆる暴力・搾取から子どもたちを守るための活動です。

この子どもへの暴力・搾取において、近年深刻さを増しているのが、オンラインにおける子どもの搾取、とりわけ性搾取です。今回の特集では、オンライン・セーフティ、オンラインでの性搾取（OSEC）をテーマに、現状や課題に対する支援活動についてお伝えします。



生活の利便性が生み出した子どもたちへの危機

現在、私たちの生活の中では、インターネットやSNSを活用して情報を手にいれたり他人とつながったりすることが、欠かせないものとなりました。しかし、その利便性の半面、ネット上の情報をうのみにしたり、オンラインで知り合った人を簡単に信用したりするなど、ネットを使うことの危険性について深く認識できていない場合もあるのではないのでしょうか。

このような危険性は子どもにおいて特に顕著といえます。ある防犯会社のウェブサイトでは「子どもの感覚ではリアルとバーチャルの区別がつきにくく、（オンライン上で知り合っ

た見知らぬ第三者）と会った子どもが誘拐されたり、わいせつな『自撮り写真』を送らされたりする事件もあとを絶ちません。」と警告しています。

このように、現在は、オンラインでの安全性「オンライン・セーフティ」に関する問題が日に日に深刻化しています。また、その中でも特に、オンラインにおける性的な搾取の問題は「OSEC (Online Sexual Exploitation of Children)」と呼ばれ、子どもたちの心と体に深刻な影響を及ぼす問題として、対策の必要性が高まっています。

途上国にも迫るオンラインでの子どもの性搾取

子どもたちがOSECの被害になる事件は、日本などの先進国だけでなく、経済的に貧しい国々においても起きています。そうした国では、収入を得る手立てとしてオンラインでの「子ども買春」や「子どもポルノ」が大人によって行われ、多くの子どもたちが性搾取の被害にあっています。

ユニセフのアジア事務所では、2016年に東南アジア10カ国に関する報告書（デジタル時代における子どもの保護）をまとめています。インターネットの普及により増大する子ども

への暴力や性搾取の危険について報告し、東南アジア地域のインターネットの普及状況と政府による取り組み（法整備や取り締まり機関の状況）を示して、必要な改善策をとるよう求めています。

▶ユニセフがまとめた子どもの保護の報告書



東南アジアの中でもフィリピンは特にOSECの危険性が高いといわれています。その理由としては、次のようなことが挙げられています。

- 貧富の差が大きく、貧困層の収入の手段としてOSECが利用される。
- 比較的安く中古の携帯電話が購入でき、安価なデータ通信が利用できる。
- 簡易な送金方法があり、犯罪の支払い報酬を受け取りやすい。
- 英語が使える人が多く、海外からのコンタクトがしやすい。
- OSECを取り締まるための法制度が、まだ十分に整備されていない。また、技術的にも取り締まりが難しい面がある。
(取り締まり機関には数千の被害報告があるが、逮捕された案件は27件にすぎない[2018年])

このような背景から、フィリピンは、子どもポルノ素材の発信が世界で最も多い国となっており、2018年には、少なくとも60万件(前年の13倍)の画像や動画がオンラインに出回っているといわれます。OSECは、犯罪者と被害者の直接的な接触がなくても、子どもに対する具体的、身体的な被害を及ぼします。トラウマにともなうPTSDや引きこもり、自尊心の喪失、自殺に及ぶ、心理的に大人としての成長が阻害されるなど、子どもたちの成長や将来の生活に深刻な影響を与えているのです。
(Child Rights Network Philippineの資料より)

私たちは子どもたちをどのように守るべきか

法律や国の制度が十分に犯罪を取り締まることが難しい中で、私たちはいったいどのように子どもたちを守っていけばよいのでしょうか？

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、問題が特に深刻なフィリピンにおいて、子どもたちへの研修などを始めています。まずは、子どもたち自身が危険や問題を認識して行動できるようにすることが重要です(子どものエンパワーメント)。

同時に、保護者や学校、地域住民が危険や問題を理解し、地域全体で子どもを守っていくことも重要です。これまでも「子どもの保護」として、研修や啓発活動を行ってきましたが、オンラインの危険性についてより強調して取り上げていくことが必要です(保護者・地域のエンパワーメント)。

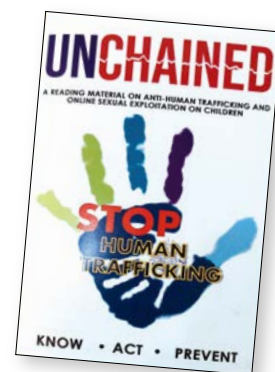
そして、ソーシャルメディアなどの提供会社、インターネットサービスプロバイダーといったオンラインにかかわる企業の責任も重要です。業界の垣根を越えて子どもを守る責任があることを、ビジネス社会は認識して行動しなくてはなりません。また、企業として従業員への行動規範を提示し、「子どもの性搾取」に関わらない大人を育てる、すなわち「子どものセーフガーディング」に取り組む積極的な経営が求められます。



▲OSECに関する国際会議に参加した元チャイルドが研修の講師を務めました

▶子どもたちと保護者に配布された人身売買とOSECの解説冊子

こうした取り組みは支援地域だけでなく、私たちが暮らす日本をはじめとするすべての国々で必要となってくるものです。



古くて新しい問題に取り組む

私たちの社会を豊かで便利なものにするためのテクノロジーを、子どもたちへの凶器として使わせないために、私たちはこの問題を正しく理解し、有効な手段をもって子どもたちを守っていかなければなりません。子どもたちをめぐるこの問題の根は、昔からある子どもへの搾取や暴力の問題ですが、その現れ方は、新しいテクノロジーによって広げられた新

しい問題なのです。貧困は20世紀から子どもをめぐる問題の根源でしたが、21世紀の今は、デジタル化された社会が子どもたちの新しい問題を生み出しています。変わりゆく社会の中で、形を変えて起きてくる子どもたちの問題を見据えて取り組みを続けていくことが重要です。

若者の力が社会を変える！
アドボカシー活動への取り組み

青山学院大学生

小田さん、高橋さん

インタビュー



チャイルド・ファンド・ジャパンは、2021年、青山学院大学のサービス・ラーニング※で講座を担当し、その中でOSECについても扱いました。そこに参加してくれた小田さん、高橋さんは、講座が終了したあとも、若い世代ならではの視点をもとに、団体と一緒にこの問題に向き合い、アドボカシー活動に取り組んでくれています。2019年に小田さんとフィリピン訪問プログラムに同行した職員大原（ファンドレイジング・広報チームリーダー）が、お二人のこの問題に対する思いなどを聞きました。

※講義で得た知識を活かして、社会貢献活動に取り組む学習形態



小田さん

高校生のときに、フィリピン訪問プログラムに参加。コミュニティの大切さを学び、現在は東北のコミュニティ支援ボランティアにも携わっている。



高橋さん

高校生の頃から、女性や子どもの課題に関心を持ち、現在はNPO法人ハナラボで、学生記者として、女性の方々に話を聞く活動もしている。

大原：お二人が参加してくれたサービス・ラーニングでは、いくつかのテーマを扱いましたが、その中でOSECの問題に関心をもったのはどうしてですか？

小田：講義でOSECの話聞いたとき、「こんな問題が起こっているんだ。全然知らなかった」と驚きました。「自分も知らなかったこの問題を、多くの人に知ってほしい」という思いが、OSECへの関心につながっています。

高橋：私は特に、最年少の被害者が生後2カ月という話にとても驚き、強い危機感を覚えました。また、全く知らなかった問題であるにも関わらず、自分の身近に迫っている問題でもあるということが、「発信しなきゃ」という思いにさせました。

大原：OSECという問題に関して、どんな問題意識をもっていますか？

小田：世界が急激にグローバル化し、IT化していく中で、強い光に隠された闇の部分なのかなと思います。また、以前からある人身売買などに比べて、世界中の人が関わるのができてしまうOSECは、世界規模の問題だと感じています。

高橋：私は、途上国だけではなく、日本の現状に強い問題意識をもっています。被害者が相談できる専門的な場がない、制度や体制が十分に整っていないという中で、被害件数だけは

増えている。そうした状況は見過ごすことができないと思っています。

大原：法制度や国・自治体の取り組みについてどう考えていますか？

小田：法律の面では日本はある程度整いつつあるようですが、被害が起こってしまったときに被害者をケアする専門的な組織がないのは課題だと思います。また、起訴率が低いことや、インターネットサービスを提供する企業をどう統制していくかといったことも課題ではないかと思っています。

高橋：日本では、自治体によって、制度や体制の整備状況に大きな差があり、課題だと感じます。国全体として法整備が行われたとしても、実際に個別のケースを取り扱っていくのは地方自治体になると思うので、そちらの整備が重要だと思います。

大原：OSECは、日本においても、途上国においても起こりうる問題ですが、両者の違いについては、どう感じますか？

小田：問題の「原因」が大きく違うのではないかと思います。フィリピンの場合は、貧困が原因で性的搾取に関わってしまうケースがありますが、日本の場合は、貧困というよりも、一方的な搾取、権利侵害のケースが多いように思います。その意味では日本のほうが問題の根が深いともいえるかもしれません。あるいは、明らかになっていないだけで、日本にも貧困が原因であるOSECがもっともっと存在するのかもしれない。

高橋：被害者が言い出せず、隠れてしまっているケースはたくさんあるのではないかと思います。一方フィリピンでは被害件数が明確になっているようですが、やはり隠されているケースも少なくないと思います。

大原：お二人は、OSECの問題について、同世代の学生へのアンケート調査も実施されています。結果を見て、どのように感じましたか？

小田：「知らなかった」という回答が多かったですが、それ自体は仕方のないことかなと思いました。でも、これからは、その状況を変えていかなければいけないと感じています。

高橋：OSECに対して、「関心をもつ」というスタート地点にたってくれた人がたくさんいたのは嬉しかったです。また、何をしてい

いか分からないという回答もあり、そうした人たちに対して、活動ができる場をつくることができれば、もっともっと若い人も活動できるのではないかと思います。

大原: 昨年11月20日のオンライン活動報告会では、支援者の方に向けて、お話をしてもらいました。支援者の方の反応など、どう感じましたか？

小田: 質問をしてくださった方もいて、関心をもってくれたことが嬉しかったです。また、子どもをもつ親世代に伝えることができたことは、ご自身の子どもを守ることにもつながると思いますし、意味のあることだったのではないかと思います。

高橋: OSECの被害がもし起きてしまったときに、それにどう対処していくか、鍵を握っているのは保護者だと思います。そういう意味でも、保護者世代の方々に知ってもらえたのは良かったです。

大原: これまでの活動の中で、難しいと感じたことや、逆にやりがいを感じられたときがあれば教えてください。

小田: 多くの人にリーチするのが難しいと感じます。広く知ってもらうために、多くの人へリーチしないといけないと思うので、SNSをより活用するといったことが今後の課題だと思っています。

高橋: 今まで知らなかった問題について、どんどん深く知ることができるのは、大きなやりがいです。また、知れば知るほど、自分にとって身近な問題なんだということが分かり、こうしてOSECについて知れたことは、自分自身の人生においても大切なことだと感じています。

大原: 今後、活動を続けていく中で、どんなことを伝えていきたいですか？

高橋: 私は、「ボランティアや支援活動は、いつからでも始められるし、チャンスを求めればだれでも始められる」ということを伝えたいです。アンケート調査からも、関心はあるけれど、何を



すればいいか分からないという人が多く見られました。今後の署名活動などを通して、そんな人と一緒に活動していけたらいいと思います。

小田: 私が一番伝えたいことは、OSECの問題はどこか遠い国の話ではなく、日本をはじめ、どこにでも存在する問題なんだということです。自分の子どもや友達にも起こるかもしれない、ということをぜひ知ってほしいと思います。また、日本では、子どもの権利に対する理解が十分に浸透していないように感じるので、もう一度、子どもがどんな権利をもっているのか見つめ直す必要があるのではないかと思います。

大原: 小田さん、高橋さん、ありがとうございました。

インタビューを終えて

アンケートといった、お二人のアドボカシー活動を通じて、同世代の若い人たちがこの問題にどう向き合おうとしているのかを示してくれました。身近に起こっている、世界規模の問題として、足元からも広く捉えてみるお二人の姿勢に、未来への確かな足取りを感じています。



これからのチャイルド・ファンド・ジャパンの活動

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、OSECの問題に対し、現在も行っている現地での研修、啓発活動などを引き続き行い、子ども自身がリスクを回避できるようにするとともに、子どもを守る地域づくりを行っていきます。

また、チャイルド・ファンド・アライアンスでは、5か年中期戦略の一つとしてオンライン・セーフティをテーマに活動していきます。Safer Internet Dayである2月8日には、オンラインイベントを開催しました。

日本国内においても、この問題を広く知らせるための啓発・アドボカシー活動を進めていきます。2月19日には、OSECに焦点をあてたウェビナーを開催し、紙芝居を使うなどしながら、問題を分かりやすくお伝えしました。また、政府への要望書提出を目指し、オンラインでの署名活動も行っています。さらには、5月に専門家を招いてのシンポジウムを開催する予定です。

ホームページやSNSなどで随時情報をお伝えしてまいりますので、ぜひ皆さま、こうした活動にもご参加ください。

新型コロナウイルスまん延にともなう 支援地域の状況

※2022年1月現在

続報

フィリピン

フィリピンでは、2021年秋以降、感染状況が一定の落ち着きを見せていましたが、2022年1月、オミクロン株による急激な感染拡大が起こっています。ワクチン接種については、供給量の不足や副作用を恐れる人が多いことなどから遅れが生じていて、現在も接種率は50%程度です。

学校については、2021年11月から、一部で対面授業の試験的な実施が始まっていますが、全面再開のめどはたっていません。

現地では、感染予防、家庭学習支援を続けるとともに、ワクチン接種の説明会なども行っています。



ワクチンについて説明を受ける保護者たち

ネパール

2021年4月から5月にかけて感染が急拡大したネパールでは、全土でロックダウンが実施され、解除には約4ヵ月を要しました。その後落ち着きを見せていましたが、2022年1月、再び感染が急拡大しています。ワクチンの接種率は40%程度にとどまっており、地方で暮らす人々のワクチンに対する知識不足や、接種会場まで遠いなどのアクセスの問題などが原因として挙げられています。

休校となっていた学校は、ロックダウンの解除とともに再開し、子どもたちを集めた研修や子どもクラブの集まりなども行えていましたが、現在は再び休校となっています。



「子どもの保護方針」を
地域住民に劇で伝える子どもたち

スリランカ

2021年5月と9月に感染拡大の波が訪れ、その後、感染者数は減少したものの、1日700人前後の新規感染が長期的に続いています。ワクチンについては、一時インドからの供給がストップするなど混乱が生じていましたが、日本からの提供などもあり、接種率は60%を超えています。学校については、これまで休校が繰り返されてきましたが、徐々に再開されています。

支援活動は継続していますが、職業訓練を担当する団体が活動を自粛してしまう、子どもが集まる活動について、感染を恐れた保護者が参加させないなど、活動の実施に困難が生じています。



地域の病院の医療体制支援も行っている

みなさんへ
はじめまして!

東京事務所の新入職員をご紹介します!



石関 正浩 いしぜき まさひろ
支援事業部長

- ① 趣味: 海や山で自然を楽しんだり、古い町並みを歩くこと
特技: とにかくどこでも適応できること
- ② (最近ですが) 築地の鮎屋さん
- ③ チャイルド・ファンド・ジャパンの成果を学び、私の海外での現場や事業運営の経験を活かし、団体のビジョン実現に向けてチームとして働きたいと思います。

- ① 趣味や特技など
- ② これまでに行ってよかったところ
- ③ 今後に向けて一言

スリランカの新しい地域で スポンサーシップ・プログラムを開始しました！

チャイルド・ファンド・ジャパンは、アメリカのチャイルド・ファンド・インターナショナルと連携して、2006年からスリランカにおいてスポンサーシップ・プログラムによる支援を行っています。これまで、農村・漁村地区のプッタラム・エリア、紅茶農園のティー・プランテーション・エリアにおいて連携を行っていましたが、2021年12月より、あらたにモナラーガラ・エリアでも連携を開始しました。



📍 モナラーガラ・エリアってどんな地域？

スリランカの東部ウヴァ地方に位置するモナラーガラ・エリア。国の中心都市であるコロンボからは、約300km離れたところにあります。一年のうち雨が降るのは雨季の4～5ヵ月間だけで、気温は27度から32度ほどの乾燥した地域です。住民のほとんどは農業で生計を立てていて、その他の職業としては、縫製工場での勤務、内陸での漁業などがあります。平均月収は50ドルから100ドル程度です（スリランカの月収は、例えば非製造業の一般社員で232ドルなどとなっています[JETRO資料より]）。



主食は日本と同じくお米。家庭菜園でとれたかぼちゃ、なす、さつまいもなどの野菜と一緒に食べることが多いです。一部の家庭では鶏ややぎを飼っていて、卵やミルクを食糧にしています。湖でとれる淡水魚を食べることもあります。

住民のほとんどは、スリランカの多数民族であるシンハラ人で仏教徒ですが、ヒンドゥー教徒のタミル人もわずかに暮らしています。5月の満月の日には、仏教の重要なお祭りであるウーサーカ祭り、1月中旬には、ヒンドゥー教のお祭りタイポンガルが開かれます。

📍 子どもたちや地域が抱えている課題

乾燥地域であるモナラーガラ・エリアでは、十分な水が得られないことで、様々な健康問題が発生しています。特に乾季には、地域住民や子どもたちが下痢や呼吸器の疾患にかかりやすくなります。一般的な風邪やデング熱といった伝染性の病気も、雨季を中心に広がります。

食糧の確保も大きな課題の一つです。お米は確保できるものの、日々の食事に必要な栄養は足りておらず、子どもたちの成長に悪影響を及ぼしています。

教育面では、先生の指導技術が低いなど教育の質が課題です。保護者も日々の生活で精いっぱいなため、子どもの勉強を見ることができません。



新たな支援地域であるモナラーガラ・エリアをはじめ、スリランカには、多くの支援を必要とする子どもたちが暮らしています。チャイルド・ファンドでは、乳幼児期・学齢期・青少年期の成長段階に合わせ、保健衛生、教育、収入創出、ライフスキル支援など、必要な支援活動を行っていきます。

皆さま、引き続きのご支援とともに、お知り合いのご紹介など、支援の輪をひろげることにぜひご協力ください。

お知らせ

活動報告会を開催しました!

2021年11月20日、オンライン活動報告会「コロナ禍の子どもたちの今と今後に向けて」を開催しました。支援者の皆さまへ、コロナ禍での現地の状況や支援活動についてお伝えするとともに、フィリピンの子どもたちや家族からの動画もお届けしました。また、OSECについても扱い、p.4のインタビューに答えてくれた青山学院大学のお二人からお話をしてもらいました。

参加者の方々からは、「オンラインだったので、遠くからでも参加できるし、移動の時間もないのでよかった。」「コロナ禍での現地の課題や支援活動についてよく分かった。」「OSECについての学生さんの報告はとても興味深かった。」といった声をいただいています。

報告会のより詳しい内容は、団体HPの最新ニュースでお伝えしています。当日お見せしたフィリピンからの動画の抜粋版も掲載していますので、右のアドレスからぜひご覧ください。



<https://www.childfund.or.jp/blog/211125report-session>



お知らせ

領収書の発送が完了しました

2021年にいただいたご寄付の領収書の発送が完了いたしました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「認定NPO法人」に認定されており、ご支援くださる皆さまには、所得税、法人税、相続税などの税制上の優遇措置を受けていただくことが可能です。特に個人の方がチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をした場合、最大で寄付金額の約40%を、所得税から控除できます。一般的に、税額控除方式を選択されると所得控除方式より大きな減税効果が見込まれます。

詳しくは、「寄付金控除について」のページをご覧ください。

<https://www.childfund.or.jp/support/deduct.html>



チャイルド・ファンド・ジャパン 寄付金控除

Q検索

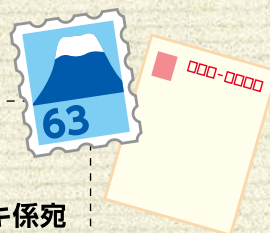
お願い

書き損じハガキ・未使用切手を募集中!

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、書き損じハガキ(未投函のハガキ)や未使用切手を集めています。送っていただいた書き損じハガキは、郵便局で新しい切手と交換し、アジアの貧困の中で暮らす子どもたちへの支援活動に活用しています。例えば、書き損じハガキ10枚は、感染予防の消毒剤6人分に相当するご寄付になります。

ぜひ、ご家庭にある未投函のハガキ、未使用切手をお送りください。皆さまからのご協力をお待ちしております!

昨年12月から、J:COM、J-WAVE、TOKYO-FMなど、各種メディアで、チャイルド・ファンド・ジャパンの書き損じハガキ募集を取り上げていただきました!



〈送付先〉〒167-0041

東京都杉並区善福寺2-17-5

チャイルド・ファンド・ジャパン ハガキ係宛

Ch^{id}Fund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

Ch^{id}Fund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う12団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

チャイルド・ファンド・ジャパンだより **スマイルズ SMILES**
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／長山信夫 事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: inquiry@childfund.or.jp
URL: <https://www.childfund.or.jp/>

2022年2月発行

〈デザイン〉
モスデザイン研究所
〈印刷〉
吉原印刷株式会社